

NPO法人 子どもセンターののさん  
理事長 安保千秋様

開設1周年、おめでとうございます。

京都の地で、温かく柔らかに子どもたちを支援されている「ののさん」の活動は、各地の子どもシェルター活動の励みです。

開設当初の様々なご苦勞もあったかと思いますが、どうかひとつひとつ、必ず道は開けるという希望をもって、一緒にこれからも進んでいきましょう。

シェルターを利用した子どもの声を、直接お届けできずにごめんなさい。  
子どもたちが話してくれた声を、いくつかお伝えしておきます。

「日本にこんな場所があると思わなかった。お金もなくなり、野垂れ死ぬ一歩手前だった。アルバイト代を全部親に持っていかれた。最後のアルバイト代を抱えて、上京した。話を聞いてくれて、ご飯が食べられて、ゆっくり眠ることができる。こんなに優しい大人たちがいるなんて、想像もできなかった。行く先が見つかったことはうれしいけれど、ここを出ていくのは淋しい。」

「シェルターにくるまでの私は、ひとりでじっと膝を抱えて、暗闇で座っていた感じ。ここへきて、ステージが変わった。いつも周りにたくさん大人の大人たちがいて、私の方を見ていてくれる。私に光があたっている感じ。私はほかの子どもたちから見たら、親から放り出され、育ててもらえなかった分、遅れていて仕方ない、ゆっくり育ってあげば、いつか追いつけると思っている。ここまで歩いてきて、自分が少しずつだけれど、成長しているなということを実感する。」

「スタッフや弁護士さんに、いろいろ突っかった。親への苛立ちを、どうすることもできずに、爆発させたこともあった。でも見捨てられなかった。どうしたらいいんだろうねえ、と、一緒に悩んでくれた。そういう大人たちに、出会ったことはなかった。」

「自分の気持ちを言葉にして、伝えるということが怖かった。周りにあわせることばかり考えていたから、自分が何を考えているのか、わからなかった。少しずつ、自分の気持ちを話してごらんと聞いてくれて、自信がなくても言葉にすると、たいしたことでもないと思うのに、そうなんだと受け止めてくれた。話しているんだ、応援してくれる人がいるんだと感じられるようになった。親に対して手紙を書き、職員や弁護士さんたちに同席してもらって、震えながら、泣きながらだったけれど、自分の気持ちを初めて伝えつことができた。」

「毎日楽しかったよ。将棋やトランプも、サッカーやマラソンにも、職員がつきあってくれた。カリヨンハウスのカラオケも、カウンセリングも受けた。勝手に遊びに行けないこと、携帯が自由に使えないことは嫌だったけれど、ご飯の心配もなく、殴られたり、怒鳴られることもなく、こんなにのびのびと、毎日を過ごした記憶はない。」

「親のところから逃げ出してきたときは、高校を卒業するとか、専門学校へ行くなんていうことは、考えられなかった。シェルターのスタッフと一緒に作ったパン作りが楽しく、パン職人になりたいと思った。自立援助ホームに移り、高校通学ができることになり、高校を卒業した。パンの専門学校へ入学したいと思ったけれど、費用がどうにもならない、諦めるしかないと思っていた。でも、カリヨンに相談したら、カリヨンの奨学金をもらえることとなった。昼間はパン屋さんで働き、自活をしながら、夜はパンの専門学校へ通った。カリヨンのクリスマスには、朝4時から起きて、OG、OB、大人たちのために、たくさんパンを焼いて、持っていった。みんなとても喜んでくれた。一番の願いだった一流ホテルのブラスセリ—に就職したいという夢がかない、来年3月に専門学校を卒業して、就職できることとなった。カリヨンの人たちに、真っ先に報告した。ありがとう！」

よいシンポジウムが開かれますように。

社会福祉法人カリヨン子どもセンター  
理事長 坪井節子